新型宇宙船の乗り心地は？

国際宇宙ステーション（ＩＳＳ）に5か月半滞在し、5月に地球に帰還した宇宙飛行士の野口聡一さん（56歳）が日本に帰国中の12日、取材に応じてくれました。野口さんは3回目の宇宙飛行で、今回はアメリカの民間企業が開発した新型宇宙船「クルードラゴン」に乗りました。また、15年214日ぶりとなる船外活動は、ギネス世界記録「二つの船外活動における最も長いインターバル」に認定されました。（編集委員・市川博正）

帰国中の野口さんにインタビュー

地球に帰還後、リハビリを終えて日本に一時帰国した野口聡一宇宙飛行士＝12日、東京都千代田区のＪＡＸＡ東京事務所

野口聡一（のぐち・そういち）　1965年、神奈川県横浜市生まれ。東京大学大学院で航空学を学ぶ。民間の会社でジェットエンジンの設計などをしたあと、96年、ＮＡＳＤＡ（今のＪＡＸＡ）の宇宙飛行士候補者に選ばれる。2005年、アメリカの宇宙船スペースシャトルで初めて宇宙へ。20年11月、アメリカのクルードラゴンで3度目のＩＳＳへ。21年5月に帰還した。

Q（質問）　スペースＸ社の宇宙船「クルードラゴン」に乗った印象はどうでしたか。

A（野口さんの答え）　これまで乗った宇宙船の、いいとこどりのような感じでした。スペースシャトルのように再利用ができ、ソユーズのようなシンプルな構造で、パラシュートを使って安全に降りてこられる。もちろん運用初号機なので、これから洗練させていくべきところはあります。でも、民間企業ならではの開発の速さや、スタイリッシュなデザインは、まさに宇宙旅行時代にふさわしい乗り物ができたと感じました。

われわれは、時代の変わり目を見ているのだと思います。アメリカのヴァージン・ギャラクティック社が6人を乗せて宇宙船の試験飛行に成功しました。またアマゾンをつくったジェフ・ベゾスさんのブルーオリジン社の宇宙船も、もうすぐ宇宙へ行きます。いろいろな会社が、宇宙への輸送手段をそれぞれのアイデアで開発しています。

Q　今回のＩＳＳ滞在で、最も印象に残ったことは。

A　船外活動ですね。4回目となりましたが、やりがいがあります。今回は年齢的にも作業内容としても非常に過酷で挑戦的でしたが、無事に完了し、ギネス世界記録にもなって、とてもよかったです。

Q　今回のミッションで一番の成果は船外活動ですか。

A　ＪＡＸＡ（宇宙航空研究開発機構）の実験もしました。宇宙環境を利用してｉＰＳ細胞を培養しましたし、実験棟「きぼう」船内でのバジル栽培は国際協力プロジェクトとして12の国と地域が参加しました。

ＩＳＳにドッキングした宇宙船「クルードラゴン」＝NASA TVから

ＩＳＳで15年半ぶり船外活動　限界をこえ続ける

Q　長く滞在したＩＳＳでお気に入りの場所はどこですか。

A　出窓ですね。「キューポラ」といい、目の前に地球が広がっていて、今の地球を見られます。

Q　飛行士の仕事の魅力は。

A　自分の限界にいどむ「挑戦」をくり返せることです。年齢を重ねると、昨日の自分に負けることが増えていきます。でもそれに負けずに新しいことにトライしていくことができます。今回の15年ぶりの船外活動もそうですが、昨日の自分をこえ続けることができます。

Q　宇宙飛行士を目指す小学生にメッセージをお願いします。

A　宇宙飛行は一人でできる仕事ではないので、みんなで達成する喜びを経験しておくといいです。スポーツでも、歌でも、何かを作るのでもいい。一人では届かないような目標を、みんなで達成できた時の喜びを味わってほしいですね。

ＩＳＳ内で一番お気に入りの場所という出窓「キューポラ」内の野口さん＝3月30日（日本時間）　©JAXA/NASA

◆ごめんなさい　14日付1面の「子どもが安心して生きる世界に」の児童労働をする子どもたちの写真説明で、「1億6千万人」とあるのは「1億6千万人」のまちがいでした。おわびして訂正します。